第四二六回　青葉会　令和三年十月二十八日（木）　（於：都立大学駅　ひのや）

選　者　川口孤舟

出席者　伊賀山そらお　今井紀久男　川口孤舟　久米五郎太　在間千恵　佐藤ただしげ
朱牟田恵洲　長谷見びん　星田啓子　山崎亜也
柿崎忠彦　小早健介　土谷堂哉　豊田ゆたか　中川雅夫　福島正明　古田昇
宮内規雄　山田けい子　山内天牛　渡邊盛雄
赤田堅・安部眞希子　重枝孝岳　庄司龍平　高橋敏郎　橋口隆　早川允章
山本三恵

投句

選句のみ

《互選句》○は選者の特選　◎は孤舟選者の選

八点　門灯を点し忘れて十三夜　孤舟　（紀・五・○千・恵・敏・○隆・啓・三）

七点　仏壇へ湯気も馳走の栗おこは　堂哉　（堅・眞・紀・忠・龍・隆・三）
菊一輪活けて巣籠終わりけり　ゆたか　（堅・忠・恵・正・び・三・○盛）
コスモスの迷路へ消えるお下げ髪　正明　（そ・紀・恵・○堂・び・允・規）
叡山の焼き討ち跡や紅葉燃ゆ　昇　（眞・紀・健・た・規・亜・け）

六点　◎ちょっぴりの塩でお握り今年米　忠彦　（紀・孤・龍・允・亜・天）
◎店ひとつなき島の秋足るを知る　びん　（○眞・紀・孤・健・恵・堂）
縦罫のノートを探す暮の秋　正明　（眞・紀・雅・啓・三・盛）
秋の日や止まったままの観覧車　仝　（紀・千・敏・啓・規・け）
◎ほろ酔いの今が幸せ月見酒　盛雄　（堅・そ・紀・忠・孤・龍）

五点　チェロ背負ひ前行く二人秋深し　五郎太　（紀・健・○敏・○正・昇）
漁火は星座に負けず秋深し　孤舟　（○健・○龍・堂・ゆ・○啓）
秋扇思ひ出あまた閉ぢにけり　仝　（そ・紀・五・孝・恵）
入日影壁の蟷螂威をただす　びん　（○紀・孝・堂・啓・○三）
◎風に抱かれ日々好日の金木犀　盛雄　（そ・紀・孤・ゆ・規）

四点　◎にぎやかな園児の列や秋うらら　そらお　（紀・孤・允・規）
満月や町内の屋根渡り行き　仝　（紀・千・雅・啓）
晴れ上がり椋鳥の声弾む朝　ただしげ　（紀・千・孝・ゆ）
禁解けて沸くや居酒屋新走り　堂哉　（紀・忠・允・昇）
老友と生命語れば秋気澄む　雅夫　（紀・○忠・五・敏）
そぞろ寒アンドロイドの無表情　昇　（眞・紀・そ・正）
ワルシャワの森の紅葉にショパン入む　啓子　（紀・○昇・け・盛）
◎音もなき風に吹かれて野紺菊　規雄　（孤・た・孝・亜）

三点　秋雨や手持無沙汰の大工達　そらお　（紀・五・び）
亡き友と夢で出会いし夜長かな　仝　（紀・千・た）

小三治追悼

滋味溢る高座を偲ぶ秋灯　紀久男（堅・雅・盛）
呆け気味にリウマチ痛む秋の冷　仝（雅・三・盛）

八重子

三味が入り静かに諭す菊日和　五郎太（紀・た・天）
一瞬の煮えばな掬ふ今年米　千恵（紀・亜・盛）
秋来たり不意に首筋つま先に　仝（紀・び・天）
月の兎油滴茶碗の景色めく　仝（紀・敏・昇）
見上げてよ友からLINE十三夜　仝（紀・敏・正）
葉が落ちて色づき残る柿一つ　ただしげ（堅・ゆ・雅）
哀しきまで痩せて今年の秋刀魚かな　恵洲（健・た・允）
見端悪き男料理やそぞろ寒　仝（紀・啓・天）
小三治の居ない東京暮れの秋　仝（敏・雅・正）
◎鷹渡る空にひたすら双眼鏡　堂哉（紀・孤・五）
青空や紅葉照り映ゆ老いの道　ゆたか（紀・そ・孝）
曼殊沙華こもり居の庭に熱唱す　雅夫（堅・紀・隆）
秋灯や伊勢佐木町の夜紅し　びん（紀・亜・天）
夕暮れてにわかに寒し秋の暮　啓子（千・た・隆）
亡妻へ今年も野菊もらひけり　規雄（紀・敏・堂）
鹿よぎる神の使ひはしなやかに　亜也（紀・五・け）
主の無き家に句碑有りこぼれ萩　けい子（眞・紀・ゆ）
ジャズ好きの義弟ジャズ聴き秋に逝く　天牛（紀・健・堂）
終バスの揺れに微睡む十三夜　盛雄（紀・孝・け）
銀杏（ぎんなん）焼き左党の父を偲びけり　仝（紀・允・昇）

二点

秋芝居テレビに掛声たっぷりと　紀久男（隆・け）
国宝も故人となれり秋の寄席　忠彦（紀・び）
風たちぬいざ生きるため秋検診　仝（紀・龍）
桐一葉カルペ・ディエムと詠みし友　五郎太（紀・亜）
不世出の横綱去るや夜半の月　ただしげ（紀・昇）
折鶴を折れぬ不器用老いの秋　恵洲（隆・天）
岩風呂に浸れば月は雲を抜け　ゆたか（紀・び）
嵐去り遊びさそうや秋の蝶　雅夫（紀・〇孝）
北佐久の火山灰地の晩稲刈　びん（紀・亜）
颱風かはた神風かコロナ退く　仝（紀・龍）
◎ゆるキャラの案山子と雀戯れり　昇（紀・孤）
野紺菊色なき風に吹かれをり　規雄（忠・ゆ）
◎屋根裏を走るは獣夜寒かな　けい子（紀・孤）
秋晴れも元に戻らぬ思ひあり　亜也（紀・規）

一点

章太郎追悼

懐かしや新派女形の爽やかに　紀久男（正）

なんとまあ傍若無人草虱　　孤舟　（恵）
◎中天に星輝いて小望月　　ただしげ　（孤）
◎明星がさっさと入りて宵寒かな　　亜也　（孤）

※　※　※　※　※

【句　評】

八点句　**門灯を点し忘れて十三夜**　　孤舟

千恵さん・・・十五夜には注目するものの少し欠けた十三夜は得てして忘れがち(私だけ?)門灯をつけてないことに気付いて、ふと見上げたら少し欠けた月が輝いていたという情景が目に浮かびます。

恵洲さん・・・門灯を灯すのを忘れるほど、十三夜の月が澄んであかるかったのでしょうね。

隆さん・・・・竹下夢二の世界か。光にコントラストあり。佳句。

七点句　**仏壇へ湯気も馳走の栗おこは**　　堂哉

隆さん・・・・湯気までも愛情の証し。

菊一輪活けて巣籠終わりけり　　ゆたか

忠彦さん・・・解禁の喜びを菊一輪活けるの表現お見事です。

恵洲さん・・・長い巣籠り生活も漸く終わりそうという安堵の気分が一輪だけ活けた菊に込められている。

盛雄さん・・・長い間のコロナウイルス対応。やっと小康状態となった。〝菊一輪活けて〟がこの作品を佳句と致しました。

※健介さん・・・当初「菊一凛活けてーーー」の句をトップに選んでいたのですが、「巣籠り」が典型的な春の季語であることに気付き降ろしました。残念です。

※紀久男・・・季重なりですので「巣籠り」を「籠り居」にされたら如何？

コスモスの迷路へ消えるお下げ髪　　正明

恵洲さん・・・「野菊の如き君なりき」みたいな少年時代の？センチメンタルな想い出。こういう純情な句もたまにはよい。

堂哉さん・・・可愛い女の子の後ろ姿と一面のピンクが目にうかびました。

叡山の焼き討ち跡や紅葉燃ゆ　　昇

ただしげさん・・いくさの悲惨さを下五でうまく表現している。

亜也さん・・・紅蓮という言葉を連想しました。苛烈な歴史が紅の彩度を高めています。

六点句　**ちょっぴりの塩でお握り今年米**　　忠彦

孤舟さん・・・副食は不要。塩むすびひとつあれば満足。

天牛さん・・・ちょっぴりがいいですね。

紀久男・・・・スキャンダルの多い海老蔵ですが、毎年弥彦山麓の岩室で田植えから稲刈りまで地元の人達と作業しています。昨年収穫した新品種に息子が襲名する「新之助」と名付けて登録され、美味しいと市場の評価も高いそうです。

店ひとつなき島の秋足るを知る　　びん

眞規子さん・・「足るを知る」――古稀を迎え、この言葉をかみしめている。地方都市の郊外で買物難民生活を体験している。そして狭庭からの収穫を手にした時、この句に共鳴する。

孤舟さん・・・住民も極く少ない離島だが、都会では味わえない自然に恵まれ、自給自足で幸せに暮らしている。

恵洲さん・・・こういう質素で欲のない生活を営んでいる島が現存することに感銘を受けます。

堂哉さん・・・旅の功用のひとつですね

ほろ酔いの今が幸せ月見酒　　盛雄

孤舟さん・・・「よくぞ男（飲兵衛）に生まれけり」を実感出来るひとときき。

紀久男・・・・ほろ酔いで終わればいいのですが、つい呑み過ぎて何度もしくじってご存知の大怪我・・・死ななきゃ治らないと自覚しております。

五点句

チェロ背負ひ前行く二人秋深し　　五郎太

健介さん・・・音楽の句を2句共選びましたが、小生もジャズ狂でかつ下手にウクレレを触るので、つい惹かれました。

敏郎さん・・・そういえばチェロの音色ほど秋らしい響きは楽器でも無さそうですね！

正明さん・・・芸術の秋ですね、上野界隈かしら

漁火は星座に負けず秋深し　　孤舟

健介さん・・・小生宇宙天文学が趣味の一つですが、納得行く句が詠めず、この句には脱帽。

龍平さん・・・冬に入ると空気が澄んで満天に星座群が現れます。地球を離れどの星に行こうかなと　考えるトシになりました。

堂哉さん・・・大きな景色ですね！満天の星を堪能したいものです。

啓子さん・・・秋が深まって星が一層の輝きを増してきたが、その輝きも漁火の勢いのある灯には勝てないようです。輝く星と灯で海と空の両方を捉えて美しい。

秋扇思ひ出あまた閉ぢにけり　　孤舟

そらおさん・・・季節の変わり目に片付けものの中にある扇を開いたら、あれもこれもと思い出し、懐かしさや悔恨などを感じたが、切りがないので閉じて思い出を打ち切った。作者の溜息も聞こえるしんみりした感じ。

五郎太さん・・今年は秋になっても時どき使った扇子だが、もう使わず、処分してもいいか。悲喜こもごもの思い出もあるが。どこか　色気も感じる句です。

恵洲さん・・・寒さを前にしまう扇、その扇にまつわる夏から秋の季節に出会った出来事の思い出も一緒に閉じるのでしょう。

入日影壁の蟷螂威をただす　　びん

紀久男・・・・流石！感嘆する好句です。特選でいただきました。

風に抱かれ日々好日の金木犀　　盛雄

孤舟さん・・・金木犀は我々人間と違い、コロナ禍に悩まされることもなく自然に身を任せつつ安寧な日々を送っている。

四点句

にぎやかな園児の列や秋うらら　　そらお

孤舟さん・・・最近少子化に歯止めが効いたのか、大勢の保育園児が保母さん達と手を繋ぎ散歩している。そのなんと喧しいこと。

満月や町内の屋根渡り行き　　そらお

千恵さん・・・夜道を歩いていると月も同時に私に合わせて動いてるように錯覚します。〝渡り行き〟にそんな印象を受けました。

晴れ上がり椋鳥の声弾む朝　　ただしげ

紀久男・・・・畑を荒らし啼き声も煩い鳥で鵯と共に嫌われております。好意的な句を初めて目にしました。

老友と生命語れば秋気澄む　　雅夫

忠彦さん・・・生命とは何でしょうか？余命？生きてきた過去？友の語らいが秋気澄むとは羨ましい。

紀久男・・・・呑み助の私と違い雅夫さんは真面目な〝学究人〟です。大阪財界人の交流の場である大阪電気倶楽部のメンバーで、講演もされています。上阪した折、先輩の小林光一さんや同期の大西和夫さんとミナミで飲んでおります。

そぞろ寒アンドロイドの無表情　　昇

正明さん・・佳作としました。アンドロイドの無機質な表情をよく表現しています。

ワルシャワの森の紅葉にショパン入む　　啓子

昇さん・・・難関と言われるショパンピアノコンクールに日本人の若い男女が上位入賞。大快挙です。ポーランドの美しい紅葉の森に演奏曲が沁み込んで行くようです。詩情性豊かな句ですね。

けいこさん・・ショパンコンクール、ユーチューブで楽しみました。皆上手で私には優劣つけがたかったです。

紀久男・・・・辻井伸之と双璧の盲目のピアニスト梯剛之の後援会事務局長をされている啓子さんの斡旋で演奏聴きました。彼も98年のショパンコンクールでワルシャワ市長賞を受賞しております。今夏の恒例のリサイタルはシューベルティアーデとして曲目は全曲シューベルトでした。

音もなき風に吹かれて野紺菊　　規雄

孤舟さん・・・僅かな風にも反応する野菊のしなやかさ。

ただしげさん・・なんとなく、秋らしい風情を感じる。

三点句

亡き友と夢で出会いし夜長かな　　そらお

ただしげさん・・仲の良い友を失い、夢で逢う、何となく秋のもの哀しさを感じさせる。

千恵さん・・・私も亡き母に今まで2回夢で逢いました。嬉しかったです。

小三治追悼

滋味溢る高座を偲ぶ秋灯　　紀久男

盛雄さん・・・人間国宝、小三治師匠追悼！

呆け気味にリウマチ痛む秋の冷　　紀久男

盛雄さん・・・リウマチの進行止めに医者の言うこと聞いて頑張ってください。

八重子

三味が入り静かに諭す菊日和　　五郎太

天牛さん・・・・三味が入り――玄人ですね。うまい。

紀久男・・・・二十数年ぶりの新派。二代目八重子と波乃久里子に加え田村亮と藤山直美の客演が大当り！久し振りに良い気分に浸りました。

一瞬の煮えばな掬ふ今年米　　千恵

盛雄さん・・・新米の美味しさは格別です。作者の気持ちが中七に充分凝縮されております。

紀久男・・・・蕪などの冬野菜の漬物と新米、新酒と相性良く、お代わりしたくなります。亡き米朝の十八番「京茶漬（ぶぶづけ）」思い出します。

秋来たり不意に首筋つま先に　　千恵

天牛さん・・・首筋、つま先で本当に寒そうです。

月の兎油滴茶碗の景色めく　　千恵

敏郎さん・・・月の兎が油滴天目の景色とは。成程。

哀しきまで痩せて今年の秋刀魚かな　　恵洲

ただしげさん・・今年の秋刀魚漁は例年になく不漁で、その上痩せている状況を上手く表現している。

見端悪き男料理やそぞろ寒　　恵洲

啓子さん・・・このコロナ禍で男性もご家庭で調理に目覚めた方が多くなったと聞きます。でもこの句の作者は季語に〝そぞろ寒〟を置かれているので心象風景は已む無くの料理でしょうか？でもちょっと苦笑いして、面白がりながらのご様子が見えるようです。

天牛さん・・・見端悪きがいいですね。

鷹渡る空にひたすら双眼鏡　　堂哉

孤舟さん・・・鷹の渡りはめったに見かけない。ようやくそのチャンスに恵まれ懸命に望遠鏡を覗き続ける。

五郎太さん・・遠くに見える大きな鳥はタカか、北からきたのか、双眼鏡を少しずつ動かし眺め続ける。独特の言葉のつながりもあり、晩秋らしい句です。

紀久男・・・・住んでいるマンションの裏山（多摩丘陵の一角）は二つのゴルフ場に隣接。一方の米軍レクリエーションセンターは農薬も肥料も使わず自然が残っており、猪や狐狸、雉、コゲラ系などの野鳥多く、ベランダに目白や山雀、雉鳩等、かつて雀に交じって鶯など珍鳥も来ておりました。稲城市の鳥は〝長元坊（ちょうげんぼう：隼の仲間）〟で保護鳥の大鷹も居りバードウォッチングの名所です。近年開発が進んでここ数年〝長元坊〟を街中で見かけることなくなり少し心配しております。

曼殊沙華こもり居の庭に熱唱す　　雅夫

隆さん・・・・「熱唱」は新しい視点。「こもり居の庭にコーラス曼殊沙華」でも。

秋灯や伊勢佐木町の夜紅し　　びん

天牛さん・・・夜紅しがいいですね。

夕暮れてにわかに寒し秋の暮　　**啓子**

千恵さん・・・夕暮れの寒さで秋の到来を感じますね。

ただしげさん・・最近の日中暖かくて、夕方になると急に冷え込む日々の気温の変化を上手く詠んでいる。

隆さん・・・・秋は釣瓶落とし。急に冷えこむ微妙な落差を見落とさなかった。「にわかに寒し」は上手い。「日の落ちてにわかに寒し秋の暮」でも。

亡妻へ今年も野菊もらひけり　　**規雄**

堂哉さん・・・野菊で亡き人のお人柄が偲ばれます。

ジャズ好きの義弟ジャズ聴き秋に逝く　　**天牛**

健介さん・・・音楽の句を2句共選びましたが、小生もジャズ狂でかつ下手にウクレレを触るので、つい惹かれました。

堂哉さん・・・久世光彦のマイラストソングを思い出しています。私は何を旅立ちの曲にしようかな？

終バスの揺れに微睡む十三夜　　**盛雄**

紀久男・・・・孤舟選者も詠まれている十三夜は小生の愛唱歌ですが、曲名も作者も存じません。湯舟で口ずさんでご機嫌です。泥酔して終電乗り越してタクシー運転手を喜ばせたことが何度もありました。

二点

秋芝居テレビに掛声たっぷりと　　**紀久男**

隆さん・・・・コロナ下、「待ってました」とテレビに掛ける声が聞こえる。「秋芝居テレビに向かふ掛け声や」でも。

けい子さん・・もうすぐ大きな声で掛声出来ると思います。やはり芝居には掛声必要ですね。

風たちぬいざ生きるため秋検診　　**忠彦**

紀久男・・・・中七の表現に実感こもっており、私など凡人には詠めません。

桐一葉カルペ・ディエムと詠みし友　　**五郎太**

亜也さん・・・さる先輩の追悼句と知って、その方の人となりを思うにつけ如何にも、との句。

※五郎太さん（自解）・・・ラテン語で「（今日という）日を摘みとれ」花もぶどうも恋も。重い病の床についている友を思う句です。

折鶴を折れぬ不器用老いの秋　　**恵洲**

隆さん・・・・老いは抗しがたい。

天牛さん・・・不器用が効いている。

嵐去り遊びさそうや秋の蝶　　**雅夫**

孝岳さん・・・台風一過、秋晴れの中、舞っている蝶を見て心躍る心境を「遊びさそうや」という言葉で見事に表現している。

ゆるキャラの案山子と雀戯れり　　**昇**

孤舟さん・・・案山子と雀は田圃では天敵どうし。しかし、ゆるキャラに変身して仲良く遊んでいる諧謔味。

屋根裏を走るは獣夜寒かな　　**けい子**

孤舟さん・・最近川越市郊外の農家の屋根裏でハクビシンが見つかり話題になった。

一点　章太郎追悼

懐かしや新派女形の爽やかに　紀久男

※紀久男（自解）・・河合雪之丞を初めて見ました。二枚目役の喜多村緑郎も共に上手いものです。新派の舞台に溶け込んで客席を沸かせて大入りでした。

なんとまあ傍若無人草虱　孤舟

恵洲さん・・・口語の感嘆詞がユーモラスで、且つ、効果を上げて居ます。草虱は遠慮会釈もなくはびこる草だということが分かります。

中天に星輝いて小望月　ただしげ

孤舟さん・・・今年10月19日（14日夜月、小望月）は、星も月も最高の輝きを見せていた。

明星がさっさと入りて宵寒かな　亜也

孤舟さん・・・晩秋になると、日中は感じられなかった寒さも、早くも宵に冷えて、秋も深まった感じがする。夕方西空に見えた金星も早々に姿を消したようだ。

次回青葉会

令和三年十一月二十五日（木）　十二時～十五時半　於：大手町　赤坂飯店パレスサイドビル店

参加会費　二千五百円～三千円（昼食・ビール等）

◇参加者は当季雑詠5句。投句は3句まで。締め切り：十一月二十三日（火）中です。

参加の可否、ご投句のご連絡は：今井宛FAXか郵送、或いは星田メール（keiko-reve@c07.itscom.net）までお願い致します。

青葉会報

一、三か月ぶりの対面句会。多数参加を見込んで、東横線沿線「都立大学駅」近くで恵洲さんに会場を手配いただきました。出席者十名、残念ながら欠席された天牛さんら十名の投句。何度かご一緒したことのある居酒屋かと思いきや、ちょっとした料亭です。日本料理「ひのや」お昼の「御膳」にビール、地酒(福島)を賞味しつつ愉しい句会となりました。五郎太さんの披講でご覧のように、孤舟選者、正明さん、昇さん。堂哉さん等が高得点でした。

眞希子さんや天牛さんからのFAX、歌舞伎座・演舞場・国立劇場のチラシ、山田ゆきさんのジャズライブチラシ、社友会会報誌「紅 REPORT」VOL. 11 等を回覧に供したのですが、回り損ねております。

二、**関係者近詠**

子供会町内から消ゆ夾竹桃　眞希子
農継ぎし日焼け前歴消し去りぬ　仝
捩花添削過ぎて子を泣かす　仝
奏楽の奉仕感謝の百合を受く　仝
深梅雨の香の香強き鳩居堂　弘子
天上の闇の涼気や材木店　仝
夏草の車窓に迫る甲斐の国　弘子
栞して眼を上ぐ青田の車窓へと　仝

渾身のちから落蝉すがりくる　陽亮
落蝉の爪の執念樹をのぼる　仝
点滴の拷問に似て妻の汗　仝
せめてもと鉢に茉莉花妻の閨　仝
猿之助「加賀見山再岩藤」
主役食ふ巳之助飛躍の夏芝居　紀久男
スケボーの炎熱払ふ十三歳　紀久男
炎熱の五輪よそ目に句座急ぐ　仝

寝かされて真菰の馬の売られをり　仝

――――――――――「森の座」(横澤放川選) 11月号

万葉の夢ここに秋の七草　盛雄
奥飛騨の炉端が恋し酒恋し　仝
山の田の寥救う彼岸花　仝
鏡中の丸き背吾柿を剥く　健介
妻の病ひ峠を越えし鰯雲　仝
学童に黙食強いるな栗の飯　仝

芝居はね栗饅頭を家苞(いえづと)に　紀久男
夕日照る丹波農家に吊し柿　仝
酒好きの肴(アテ)に干柿手とまらず　仝

――――――――――「きさらぎ句会」10月

白桃を剥く静かなる午後なりし　允章
秋茜日毎に空の藍深め　仝

三、孤舟選者近詠

笑はせてほろりとさせて村芝居　烏瓜手繰り寄せれば茜雲
噴煙を朱に染め釣瓶落しかな　小型機の着陸まぢか草紅葉　鯊釣りの浮子の波紋や茜空

四、

「銀座百点」・・・タウン誌のはしり。「日本橋」が続いて全国に広がりました。
7月号は800号記念号として巻頭座談会(山川静夫、嵐山光三郎、中尾彬、山田五郎)
特別対談(仁左衛門・玉三郎)掲載。
銀座俳句の選者高橋睦郎の作品「青嵐抜けきし顔も手も真青」
8月号「火の垂るやまた掬ひ上げ飛ぶ螢」
9月号「四方山に地獄噴くなり夏土用」
10月号「小鳥来よ伸びしろのある晩年に」

五、

毎日新聞文化欄コラムに坪内稔典が「季語刻々」というタイトルで毎日一句解説。
芭蕉自筆の「野ざらしを心に風のしむ身かな」などを所蔵している伊丹の〝柿衛(かきもり)文庫〟が、現在休館中で十月二日から十二月五日まで文京区にある永青文庫(細川護熙理事長)で展示中の由、盛雄さんからご案内いただいております。

六、

11月6日の日経は商社五社の最高益を大きく報じております。近頃、商事、伊藤忠の露出が目立っておりますが、弊社の全面広告(11月1日)でMarubeni Gallery開館記念展、「日仏近代絵画の響き合い」勝俣宣夫元会長ら8人が皇居で旭日大授章を天皇陛下から手渡されたことを報じておりました(11月10日)

七、

丸紅グループ誌「M.SPIRIT」が113号(10月号)から編集・レイアウトが一新され、私等年寄りにも読みやすくなっております。

令和三年十一月十八日　紀久男　記